

殷宗仲景考

册一	甲	昭和	一	第	部
数部		年	三	部	
		月	一	部	之
		日	八	部	部
			册	號	

滋賀縣立晴所中學校

町 〇
函 〇
段 〇
號 178

1370
/

醫宗仲景考序

醫宗仲景考序

醫宗仲景考序

醫宗仲景考序

醫宗仲景考序

醫宗仲景考序

醫宗仲景考序



醫巫宗仲景考序

竊聞我神代之古。天神御上。地祇
 治下。範鑄造化。嚮策顯幽。乃將憫
 民之夭折。攘物之災異。於是始定
 治療之方。製禁厭之法。天下咸蒙
 恩賴。而覩効驗也。謂之方術之濫
 觴。醫藥之權輿。夫神祇之德。猶蒼

穹之覆而不遺。洋溟之包而無外也。則根本之幹立。雖在我而枝葉之滋蔓。有在彼者矣。是故彼外蕃之古。方術有如黃老。鑿藥有如扁倉。傳至于東漢。有葛孝先翁。傷寒之論成焉。復傳至于西晉。有葛稚川翁。金匱之方出焉。布諸當世。傳

諸後葉。以使人救橫夭。免淪喪焉。二翁之德。亦偉矣。盛哉。雖然。或稱張機。又號仲景。寓其名。而隱其迹焉。是玄家真人。之所以立陰功。而規輕舉也。是以古今之間。億兆之鑿。一無宗其道。而宗其人。知其書。而知其迹者焉。嗚呼。天下安不果

無洞視玄冥。徹聽幽微者哉。我氣
吹舍先生撰定神典。振起古道。窮
覽之書如山。著述之筆如煙。無竒
祕不兼綜。無遺逸不摭拾。夫游淵
源則涉流派。攀巔頂則臨峽麓。於
是輯考此書。題曰鑿宗仲景考。議
論之高。攷徵之富。果斷之明。探討

之深。始可以知二翁之真名實迹
而已。先生之德。蓋可謂羽翼神祇
儔匹仙真者矣。國秀不敏。辱奉洒
掃。受警咳。雖然。豈能窺墻入室。鑽
至堅仰彌高哉。幸受此書。方乃弄
管。而窺麗天之明。擲彘虺而觀浸雲
之瀾耳。於是相議以請諸先生。而

附於剖劂。刻於桑梓。以贈於同志。
之執也。投劑者焉。善讀焉者。若知
其真名實迹。而宗其宗。則亦將有
宗其宗之宗者矣。謹序。

文政十年丁亥十一月朔

館林藩士 生田國秀



鑿宗仲景考

平篤胤輯考

門人

阿波國 松浦道輔

備前國 玉中春緒

武藏國 川崎重恭

同校

傷寒雜病論金匱要略方論此二書は其原本一々して今存る
傷寒論を傷寒雜病論の雜病篇字供せしもの。金匱要略方論
は。それ傷寒篇を供せる物なるが。古今億兆此醫人。その方法
小從事して。鑿藥の祖典と尊奉する。其撰者を張機字仲景
也。傳子來却れと史籍よそれ傳りき事字誰も甚く遺憾に思
ふる不。此頃や此人を考得し。其を史記晉書列傳を依。葛洪

字、稚川の傳小。洪尤好神仙導養之法。從祖玄。吳時學道得仙號。曰葛仙公。以其煉丹祕術授弟子鄭隱。洪就隱學。悉得其法焉。後以師事南海太守上黨鮑玄。玄亦內學。逆占將來。見洪。深重之。以女妻洪。洪傳玄業。兼綜練醫術。凡所著撰。皆精覈是非。而文章富贍。云々と見え。葛稚川の號を抱朴子と稱す。是を以て其著せる子書乃内篇外篇を抱朴子と名けし。今此の考中。其子書と稱する。下小其著撰の目を舉る。依中尔。金匱藥方百卷。肘後要急方四卷とあり。稚川翁此此二書を撰はし。事々其子書雜應卷。余見戴霸華陀所集金匱綠囊。崔中書黃素方及百家雜方五百許卷。謂ゆる金匱は戴霸が撰と聞え。綠囊は華陀が撰と聞え。里其を華陀が方書を青囊に收れ。秘藏せりと云。をり號あり。ルむ。故青囊とも諸書小見え。志ら稱せ。依後世の醫方

書も有里。次り引く肘後方序。子左。綠秩とも云。子。崔中書が。丹法何の。遐覽卷小。崔文子肘後經何の。劉向が列仙傳。崔文子傳を載して。赤丸黃散。云ふ二方を作す。黃散を以て疫氣を治せる事見え。崔中書とは此人。云ふ。楚辭天問。此人の事を作り。其王逸が注。おと搜神記。王子喬此弟子。崔と云。子れを甚古き人あり。○松浦道輔云く。外臺祕要方小。崔氏方とて。崔文行が方書を多く引たり。此を王素が自序。は。崔尚書。云う。きあり。尚中い。於れ。字の誤。子。同。人。子。非。じ。み。と。云。子。里。猶。下。小。論。ふ。字。見。後。し。甘胡呂付。周始。唐通阮河南等。各撰集。暴卒備急方。或一百十。或九十四。或八十五。或四十六。世人皆爲精悉。不可加也。甘胡をり。下五人が。序の相照して。知べし。阮河南は。本小阮南河と有ま。と。道輔云く。誤寫あり。其在外臺祕要。引たり。崔氏方の文。阮河南蒸あり。其を舊唐書小。阮河南方十六卷。阮炳撰。新唐書。阮河南方十六卷。阮炳。ま。阮河南藥方十七卷。亦と有れ。を。あり。

余究而觀之。殊多不備。諸急病其尚未盡。又渾漫雜錯。無其條貫。有所尋按。不即可得。而治卒暴之候。皆用貴藥。動數十種。自非富室而居京都者。不能素儲。不可卒辨也。又多令人以針治病。其灸法又不明處所分寸。而但說身中孔穴榮衛之名。自非舊醫備覽明堂流注偃側圖者。安能曉之哉。此文小。甘胡をり下五人が撰集せる書等の大體を觀る

余所撰百卷。名曰玉函方。皆分別病名。以類相續。不相雜錯。其九十三卷。皆單行徑易約而易驗。籬陌之間。顧盼皆藥。衆急之病。無不畢備。家有此方。可不用醫。此文玉函方と云ふるも即本傳に金匱藥方百卷やあり書に

至。互に名の易れる由を。下云を見候し。其九十三卷と何る九十を凌めて卒字の誤寫了て。大れ謂ゆる肘後方あり。其は次を引く肘後方。序と相發して辨ふ候し。○道輔が説小。九十を必。師説此如く小て。其を凌めて救の誤字あり。然るは其此

唐音をキイ。救を唐音キウ。冊をウとイを韻通するをり。誤此るうと言ふり。斯て後小。平津館叢書中ある孫星衍が校正の本字得ざる小。其致拾參卷とありて。孫語よ。當作救卒。即肘後方也。云子玉。致拾の字をよ。誤れるをま。と孫が説此をく符へるを最珍しく。出そ。皆此。校本を得て後了。今引ざる文をも。此加し。去訂正せり。見あ人俗本。異形る字。勿怪みそ。

醫多承襲世業。有名無實。但養虛聲。以圖賤利。寒白退士。所不得使使之者。乃多誤人。使媵理之。微疾成膏肓。之。澁禍自閑。其要勝於迎無知之醫。且暴急之病。而遠行借問。率多枉死矣。と何里。此節も本書小錯亂行文ありて通じ難きは。今を其文字約めて引こり。本書と合せ見て知候し。 亦る肘後方の自序小。余既窮覽墳索。以著述餘暇。兼綜術數。省仲景元化金匱綠秩。劉戴祕要。黃素方。近將千卷。此文を上小引く雜應卷小。余見戴霸華陀所集金匱綠囊。崔中書黃素方。及百家雜方五百許卷。と云ふ文了當れど。及百家雜方五百許卷を。近將千卷。此四字小約めて。劉戴祕要也。

云ふ語を加へるあり。但し此四字。本書小。金。患。其混雜煩重。置の上より入るとは。錯亂形。至。故。今改め。鈔し。抄。有求難得。故周流華夏九州之中。收拾奇異。摭拾遺逸。選而集之。使種類殊分。緩急易簡。凡爲百卷。名曰玉函。然非有力不能盡寫。大。小。雜。應。卷。有。余。所。撰。百。卷。名。曰。玉。函。方。皆。分。別。病。名。以。類。相。續。不。相。雜。錯。と。云。ふ。小。當。れ。る。文。有。至。維。川。翁。の。正。道。を。問。ひ。古。書。を。尋。ぬ。る。不。勞。う。れ。し。と。其。本。傳。小。も。尋。書。問。義。不。遠。數。千。里。崎。嶇。冒。涉。期。於。必。得。遂。究。覽。典。籍。と。見。え。し。り。思。ひ。合。を。傳。し。又。見。周。甘。呂。唐。阮。諸。家。各。作。備。急。既。不。能。窮。諸。病。狀。兼。多。珍。貴。之。藥。豈。貧。家。野。居。所。能。立。辨。又。使。人。用。鍼。自。非。究。習。醫。方。素。識。明。堂。流。注。者。則。身。中。榮。衛。尚。不。知。其。所。在。安。能。用。鍼。以。治。之。哉。是。使。鳧。雁。執。擊。牛。羊。搏。噬。無。以。異。也。雖。有。其。方。猶。不。免。殘。害。之。疾。應。卷。小。甘。胡。呂。付。と。云。ふ。る。を。至。安。能。曉。之。哉。と。云。ふ。ま。で。小。當。れ。る。文。有。り。余。今。採。其。要。約。以。爲。肘。後。救。

卒三卷。率多易得之藥。其不獲已。須買之者。亦皆賤價。草石所在。皆有兼之。以灸灸。但言其分寸。不名孔穴。凡人覽之。可了其所用。或不出乎垣籬之內。顧盼可具。苟能信之。庶免橫禍焉。大。小。雜。應。十三卷。皆單行徑易。籬陌之間。顧盼皆藥。衆急之病。無不畢備。家。有。此。方。可。不。用。醫。と。云。ふ。小。當。れ。る。文。有。至。是。字。も。て。九。十。字。の。疑。有。く。卒。有。る。を。辨。ふ。傳。し。既。小。論。語。に。世。俗。苦。於。貴。遠。賤。也。卒。字。を。五。十。小。誤。れ。至。と。云。ふ。例。も。有。り。近。是。古。非。今。恐。見。此。方。無。黃。帝。倉。公。和。鵠。俞。跗。之。目。不。能。採。用。安。可。強。乎。と。云。ふ。至。今。此。序。文。を。觀。る。小。正。小。雜。應。卷。小。記。せ。る。語。を。序。文。體。亦。改。め。記。れ。し。文。有。て。其。了。世。人。の。橫。夭。を。救。は。む。と。懇。切。に。諭。さ。ま。し。文。意。お。よ。二。書。を。撰。は。ま。し。旨。も。い。と。著。明。小。知。ら。れ。多。り。然。る。小。雜。應。卷。小。戴。霸。と。あ。る。字。肘。後。方。小。は。仲。景。

也。有_レ聖。今此を考ふ。依_レ子。雜應卷小。華陀といふ姓名有りて記せ
る字。肘後方序亦は。元化と云ふ字を書_レる小。準子思ふ子。仲
景といふ毛戴霸と云子。依_レ人の字と云ふ。聞え多_ク。推川翁の
文おして。かく相違ある事。殊_ニ。瀾く心を止めて考ふ。唐の
事あり。華陀が字を元化と云し。おと云。史傳に見えて人。何_レ
れ_ニ。知。お_レ。推川翁此本傳小。金匱藥方と云るを。雜應卷お
肘後方序小玉函方と云_レ。然れば。推川翁此撰_レる百卷の方
書は。かく二名を稱し。お_レ二名を合せて。金匱玉函方とも稱
して。其金匱てふ名は。戴霸字。仲景が方書此古名を用ゐると
聞えあり。序小を。仲景。金匱と云_レ。肘後。斯_レて其方書を。
全書今傳はら_レ。今存_レる金匱玉函要略といふ書を。其金匱玉

函方を。晉末小出_レ。王叔和が要略せる書あり。始_レ。晉。太醫
令王叔和集と有_レ。所_レ。知_レ。王叔和を。推川翁。然_レ。依_レ。其。要
略せる本を。久しく湮没して。世小知る人無_レ。しを。再_レ。び。世
小顯_レ。れ。依_レ。趙宋此世。有_レ。る。但_レ。し。周禮疾醫職の。唐。
金匱云。神農能_レ。嘗_レ。百藥。則_レ。炎帝者也。と云ふ。文あり。今此要略本
は。此文なき。賈公彦が見_レ。る。其。本書の。殘缺。お_レ。小。や。
其は。加_レ。の。書。此。林億等が。序文中。翰林學士王洙。在_レ。館閣。日。於_レ
蠹簡中。得_レ。仲景。金匱玉函要略方三卷。上。則_レ。辨_レ。傷寒。中。則_レ。論_レ。雜病。
下。則_レ。載_レ。其。方。并_レ。療婦人。乃_レ。錄_レ。而。傳_レ。之士。流_レ。戈。數家耳。以_レ。其。傷寒。文
多_レ。節略。故_レ。斷_レ。自_レ。雜病以下。終_レ。飲食禁忌。凡_レ。二十五篇。除_レ。重複。合_レ。二
百六十二方。勒_レ。成。上中下三卷。依舊名曰_レ。金匱方論。と有_レ。り。て。知_レ

考し。あを得たる時を宋仁宗が代あるたと。文献通考及び徐
 鑑本の按小見えと至。儲林億等が校正本は題名を金
 匱要略方論と題して此序文小此を得たる由を云ふ所小は
 金匱玉函要略方と云い下文小依舊名曰金匱方論と云へ
 るは孰れ古名あり云云こと詳からむ聞ゆべき金匱玉函要
 略方といふが元本小題せる名ありて金匱方論と云い金匱要
 略方論あり云ふを林億等が私う略せる名と聞えたり。稚川翁此撰考るを百卷ありを
 約免て三卷と爲あるが故小要略の字をは加あるあり。其約
 ある時小王叔和が自の意を摺入れて書成ありと見えたり。没
 めて稚川翁の心あらぬ文ども多く見えたり。其を擇ひて
 刪去し。して此を林億が序す。仲景金匱玉函要略方と有れり。
 そま實は稚川翁此玉函方あり疑なき事は右序文の次小
 一字低して仲景金匱錄岐黃素難之方。近將千卷患其混雜煩
 重有求難得。故周流華裔九州之内。收合奇異。摭拾遺逸。揀選諸

經筋髓。以爲方論一編。其諸救療暴病使知其次第。凡此藥石者。
 是諸僊之所造。服之將來固無夭橫。或治療不早。或被師誤。幸具
 詳焉。と有る文を孰く察て知考し。世の醫學者ら此出せる本
 匱錄岐黃素難之方と句せるを非あり。下は辨ふるま見て知考し。此文ありて稚川翁此原本
 小記されし小序あるを王叔和が要略せ依時。發端の文小
 彼がは加しらを加すて遺せるあり。其を何とあるは。仲景金
 匱と云ふを。將千卷と云ふ。十五字は上彫る肘後方序す。省
 仲景元化金匱錄秩劉戴必要黃素方。近將千卷。何る小當れ
 は。原本小志り有るを。元化秩劉戴必要。此七字を刪去
 至。錄字を録し。改めて。黃素方此三字を殘し。岐難之の三字を

攬入して録岐黃素難之方と文して素問難經あど此方を採
用して此書を造れる趣小誣と依あり然るを難經を更あり
方うを有る心を平子して孰く思ふべきし此は王叔和が口氣
にて金匱要略を更あり傷寒論金匱玉函經あど子攬入せる
も皆此口氣を免れ交はる僅了此をう玉の短文をまら斯此
如き奸文あれ右の書等子攬入多きおと思いやるべきし
然れをある患其混雜云くと云う玉爲方論一編と云おでを
肘後方序小患其混雜煩重有求難得故周流華夏九州之中收
拾奇異摺拾遺逸選而集之使種類殊分緩急易簡云くと有依
と同文あり少しく文字の替れる耳ある此文の存する小依
て要略三卷此原本やぐて稚川翁此玉函方百卷を依おを著
明小知られと里然る小世くの醫學者ら此由を知られ徐鎔
校本と云を始め右此小序字刪去とる本

の有るを最もをある玉實を此文ある金匱玉函方の出自を
知り後人の攬入をも辨し察るべき證文あり鑿此爲おを金
文玉章とも云傍はる其原本玉函方をそ此うみ古人此方論
き物なるやを多く採れ玉を聞ゆる右の小序雜應卷肘後方序とも了
を多く採れ玉を聞ゆる右の小序雜應卷肘後方序とも了
金匱てふ名を宗と出し自撰此方書おを金匱字を冠れ依
た中おも其撰者戴霸字仲景を重じと玉と見おまは其子書
中ふ其人の傳記ありやと尋ゆる至理卷小越人救虢太子
於既殞胡巫活絶氣之蘇武淳于能解顛以理腦元化能剗腹以
漸騰文摯衍期以瘳危困仲景穿胸以納赤餅此醫家之薄技猶
能若是豈況神仙之道何所不爲と有のみあり其時處位を知
べき文あり文摯より赤餅まで十六字坊開の本子落りり今
を孫星衍が校本ふ從れ玉徐堅が初學記小此文

を引くるもの。衍期を抑仲景といふ人。稚川翁の志る重むじ。愆筋とあり考ふ。抑仲景といふ人。稚川翁の志る重むじ。且それ世遠うらぬ人と聞ゆ。後漢書。三國志あどふ其名。お小見えぬ。右小舉る稚川翁此書等を除て。正しき書ては。晉書に。皇甫謐字士安が傳小載ある。釋觀文小。士安を其身の多病を歎きて。黃帝創制於九經。岐伯剖腹以蠲腸。扁鵲造統而尸起。文摯殉命於齊王。醫和顯術於秦晉。倉公發秘於漢。皇華佗存精於獨識。仲景垂妙於定方。徒恨生不逢乎若人。云々といふる耳。皇甫謐云。西晉の初代武帝の仕りて。其太康三年と推上せ。計ふ。六十八歳おて卒れる人あれむ。此を逆さまに有る字。其が作れる文小かく記せ。仲景てふ名此物よ所見くる初めりて。是と然むとも。唯小仲景とのみ言りれむ。此里古きを有ることあり。

文小ては。姓名と毛字とも詳あらば。然るる此を南陽に張機也云ふ人此字也爲と依む。彼傷寒論の序に。南陽張機著とあると。王叔和が撰修る脈經に。傷寒論ある方論を採りて。張仲景也稱せ依とす。據て後人の定めも依事形るが。此を實小然も有依し。此を除きて。晉以前に古籍に。張機字仲景と載せる數多。河上公と古時證を形し難し。然るる。稚川翁の著書とも。尔據ときは。上も記せる如く。戴霸字仲景と云いし人。聞ゆ。依尤。最も不審しき事小。そ有る依。故爰小お此。年ある思。いを潭免て考ふる小。此人の傳に詳あらぬを。漢き由何る事あり。此を別子大陰德を修むる真人に。わざと寓名を種く小。

稱して其實名を濶く秘せる。推川翁まゝ其旨を得て其方論を採抄すも其法を守りて其實名をは顯さざる也。宜し
あそ二千載小近く其本傳の知られざりしれ推川翁の博學抱朴するも他人の撰せる書をと其題名をさす用ひ抄其人の事實を云はさぬ心著き事あら交や但し此を己が心あそ有は傷寒金匱を推川翁まかけて論する人
とあり然るを抄傷寒論此序小漢長沙守と有れ也。是寓言形望其を近く水戸の原昌克と云いし人の叢桂偶記といふ書子張仲景不詳何時人傷寒論自序世人多疑其偽撰而言仲景後漢建安中之人而官至長沙太守是以自序爲自序者也。范曄後漢書只有張氏爲南陽族姓之語果其有張機字仲景南陽人而學同郡張伯祖者經方大有時名則何不與郭玉華佗等

同傳。此昌克が説はかの自序をも取ざる趣あまど彼序を實小撰者の自序ある論あり其を下小辨ふるを見考し靈帝時孫堅守長沙太守孫堅とある文及袁術有南陽以蘇代領長沙蘇代はの處に長沙太守孫堅とある文をも引て證と爲し後漢書の袁術が傳司馬彪が戰略を引て證とせ建安三年長沙太守張羨率零陵桂陽二郡畔劉表劉表は後漢書劉表が傳魏志桓階が傳を引て證と爲し劉表を荆州太守此劉表を併せ持し羨卒子懌嗣爲長沙太守劉表併之劉表は魏志ある劉表傳蜀志黃忠傳を引て證と爲し或説劉表傳の注英雄記曰張羨南陽人とあるを引て仲景を羨が族あて表が羨を破れる後仲景を代らしあると云れど信する不足ら之表卒子琮代立遣使請降曹操平荊州辟劉巴爲椽使招納長沙零陵桂陽を引きて證と爲し曹操敗於赤壁引軍歸鄴先

主表劉表長子琦爲荊州刺史又征四郡長沙太守韓玄降先主
使諸葛亮督零陵桂陽長沙三郡蜀志諸葛亮傳を引
證とせり先主とは蜀劉備
あり又擢廖立爲長沙太守蜀志廖立傳長沙既非
漢家有後終屬于吳蜀志建安二十年の文を引て證
宮仲宣といひし人の嗚呼矣草と云ふ物由是觀之靈獻之
也記せ至然れど此考此如くハ委しうらば由是觀之靈獻之
間似無令仲景守長沙之日也諸書所記仲景不一皆出于附託
特以皇甫謐所說爲古其他不足言焉と云る也實不然然說亦
至是子以て漢長沙守とあるが寓言を依事をおお辨ふは
右の昌克が説をたを精く長あるま今を所狭くはて昌克説
て右此如く約めぬ至其偶記不就て見るはし
小皇甫謐が所説を爲古と云依は上小引とる釋觀文也
○十

皇甫謐が撰と云い傳ふる彼甲乙經序小漢有華佗張仲景仲
景見侍中王仲宣時年二十餘謂曰君有病四十當眉落眉落半
年而死令服五石湯可免仲宣嫌其言忤受湯勿服居三日見仲
宣謂曰服湯否仲宣曰已服仲景曰色候固非服湯之胗君何輕
命也仲宣猶不言後二十年果眉落後一百八十七日而死終如
其言雖扁鵲倉公無以加也華佗性惡矜技終以戮死仲景論廣
伊尹湯液爲數十卷用之多驗近代太醫令王叔和撰次仲景撰
論甚精指事施用とある説とを云す此文おき甚く約めて
引これむ委くを本書
を見し仲宣とは魏の曹操子釋觀文を然る事あれと甲乙
經を皇甫謐が所説と爲して引用せざるは非ありそは彼經此
○十

初免小皇甫謐撰と有れ也。此を疑ふく後人の名字託せる形
至。其由を晉書の本傳小。其著述の種くを擧ぐる中。此書の
目なく。且それ著述了。帝王世紀。高士傳ちと云も有て。史學小
長する人ある也。彼自序と云ふ也。伊尹撰用神農本草。以爲湯
液と云ひ。仲景論廣伊尹湯液爲數十卷也。も云て。伊尹を醫を
知る。倭人と爲る。倭を。皇甫謐小有まじき妄説あり。山田正珍
の敗鼓録
小。伊尹を殷湯王の大臣して。醫術を知れる人。小非るを。甲乙
經。右の如く云るを。後世の愚醫輩。動てれを。伊尹字以て。
醫をも爲る。ゆと説く。此を鶡冠子小。伊尹醫殷。太公醫周。范蠡
醫越。管仲醫齊。也。有る。至附會せる。あらむと云ひ。丹波元簡主
の醫贖小も。此事字論いて。漢書藝文志。湯液經法十六卷。豈伊
尹所作耶。活人書。衛生寶鑑等。伊尹湯液論。所謂湯液。雖今無傳
其出於後人。之依托。明矣と云れしを。其小然る説。小。醫壘元
戎。傷寒金匱要略。皆張仲景祖神農法。伊尹體箕子作也と云

る類を論ふるも。足らむ。儲墨子貴義篇小も。殷湯が言ふ。伊尹
之於我國也。譬之良醫善藥也と云る。あに見也。正珍の引くる
鶡冠子の文は。其世賢
篇といふ。見えより。お近代太醫令王叔和云く。といふ語
もいを謂ふし。然るを皇甫謐を。晉北初代武帝小仕了て。其代
小死する人形は。王叔和。晉世人とは聞かむと。皇甫謐が前
了近代と指し。き代無支物を。皇甫士安いうて。然る拙文を作
らむや。若し。此文を採む。あえ。王叔和を魏世の人とや云
書。多れを。晉世の抑。此王叔和と云ふ人。傷寒金匱を撰次せ
る。小由了て。其名を。高けむと。晉書小傳も。所見も。有る。あを無く。
何時の人と云ふこと。古書小其議あり。故小。唯かの甲乙經序小
據了て。西晉北人。人を。愚る。思ひ居むと。此を疑ふく。東晉北

末世おろ小出ことる人あり。金匱玉函經の林億等が序し王叔
濂が醫史し王叔和高平人也。仕西晉爲太醫令云々と云ひ李
太醫令と云ふ類るを更に小證しなき説あり。其を何を以て云ふれ
は。稚川翁を西晉に初代武帝が太康二年と云ふ年に生まて。
八十一歳に死す。東晉の穆帝が升平五年に仙去せる。其撰は
むし金匱玉函方を要略せるを以て。稚川翁とり後の人あり
とき著明アキラカあり。稚川翁のおとと晉書の本傳に徒に年八十一
子書に委しく微として太康二年の生れ。升平五年の仙去と考
す定めし。皇志都能石屋に委く云へる。○志都能石屋を予
が殊に神醫道の淵源を論ずるにあらずは。彼が撰める脈經
書の名あり。下に委しくは。効ふ傳し。あらずは。彼が撰める脈經
此自序に古醫の姓を數舉すて。其所傳異同咸悉載録と云ふ中
小葛といふ姓を舉するに。稚川翁を除きて誰も有らむ。然し此

は王叔和を。稚川翁より後ある。晉末の人あるはと疑ひ無し。
皇甫謐は武帝が太康三年に死すれば。王叔和はそれより百
年餘に後の人あり。甲乙經をし皇甫謐が作らむを。王
叔和が事實を載せまし。いふ。かく時代を定めて考ふるに。
おと。是を以て辨し傳し。いふ。かく時代を定めて考ふるに。
彼甲乙經を。王叔和がゆもあらずは。遙か後人に。彼が脈經の説を
黨はるに。有りて撰れる物に。其を晉に出て。謂ふ。劉宋に
世を経て齊世と革すての頃に。や出来し。王叔和も然し
り。遠かき人に。あらば。是は。右に如き時代の誤りは有らずは。物を
や。是をもて。彼序に。仲景の事實を記せるに。皆にある事を
辨し。傳し。此は。偽書出来てより。以て。和漢の醫學者に。あらずは。心
證とせるに。いと固陋な事をあらす。但し。其を皇甫謐と爲す
あるは。彼序に。吾病風加苦なり云ふ。と書くる字思ふ。其本傳

小多病を至し事此見ざる小思ひとせ。病て醫を學ぼう趣小
其撰を彼に依托し。おふ扁鵲が齊桓公此色字望て。豫に其病
を察し至之云ふ事あを思ひて。仲景見侍中王仲宣云く此
事字毛造れ至と聞也。仲景そ此世不然。尤う至神察の聞え有
む。史書に其傳を載ざらめやは。然るあれと。彼經此本文を
て。中よは取用ふ。序き説も少うらば。故今深く案ずる。子雅川
翁の子書選覽卷小。其師鄭思遠よ至傳受せる書等の目を舉
ぐる。醫書類と思え。中よ。甲乙經一百七十卷と載至。皇甫
謐が撰と稱する。甲乙經。毛しくは後人此。甲乙經此殘缺本を
得て。其由來をえ知らば。謐に他書の説字も攪入る。毛て。皇
甫謐が名を假りて。人の信傳く取成る。物小毛や有。序き。其
書の題名字精しく。毛。黄帝三部鍼灸甲乙經と有るを以。序
て。毛。其。毛。と。毛。玄家不出る。書ならむと推量られ。毛。序
其。甲乙經小。右此妄説を載る。故。毛。以來。それ小本。序き。種

種此説とも出來し中よ。趙宋世小。加の林億等が校正せる傷
寒論の序小。張仲景漢書無傳。見名醫錄云。張仲景南陽人。名機
仲景。其字也。舉孝廉。官至長沙太守。始受術於同郡張伯祖。時人
言。識用精微。過其師。所著論。其言精而奧。其法簡而詳。非淺聞寡
見者所能及。自仲景于今。八百餘年。惟王叔和能學之。と有る。人
多く信用ふ。毛。と。毛。於其名醫錄と云ふ書。此よ至以前此物小
聞え。る。事。あ。く。當昔の古書。あ。毛。有。序。ら。毛。序。め。て。甲乙
經よ至。毛。後此書。形。至。毛。序。長沙太守。形。ら。毛。事。は。上。小。記。世。係
原昌克が説小。明あり。張伯祖と云ふ人。此事實も古き物。不
見え。毛。總ての事實。うち符。る。證。あ。け。毛。序。は。信。ら。れ。毛。事。あ。至。

或人ハ其名醫録と云、唐書の藝文志ハ甘伯宗名醫傳七卷の目あり其云ハ若くは梁ハ陶弘景が名醫別録を云、
其とも云、其の書の云ふとも、其の書を云ふとも、
其の書を云ふとも、其の書を云ふとも、
郭小探れる古琴疏と云ふ物ハ張機字仲景南陽人受業于張
伯祖精于治療一日入桐柏覓藥卽遇一病人求診仲景曰子之
腕有獸脈何也其人以實具對乃嶧山穴中老猿也仲景出囊中
丸藥舁之一服輒愈明日其人肩一巨木至曰此万年桐也聊以
相報仲景斲爲二琴一曰古猿一曰万年とあるは彼傷寒論序
小據ゆてかゝるをかしき妄説を云ひ出しし物ありそは業を
張伯祖と云ふ人ハ受しりと云ふと總て宋世頃の書ハ見え
始め老猿ガ診を求めあり云ふ説ハ加の黄帝比世ハ馬師
皇といひし人ハ許子龍の降王來て診を請しりと云ふ事ハ
や繩業て作出しし妄説とある聞えし是此外ハ宋世以來

の書ハ太平廣記ハ何願妙有知人鑿初郡張仲景總角造
願順謂曰君用思精密而韵不能高將爲高醫矣仲景後果有奇
術云くと彼王粲を見て病を指しりと云ふ妄説を記し張果
ガ醫説馬端臨ガ文獻通考あど小も其事を記し趙開美ガ仲
景全書小引する醫林列傳李廉ガ醫史あると其布ら數ハ仲
書どもも其事を載せれど用ふ傍き説を有と無し和漢
古今ハ鑿學者とち然とぐり上件の書とモ此本據也爲ら
きハ苦みて北ハ訪ハ南ハ走至て求めたり宋世ハ羅貫仲と
いふ者の戲作せる三國志演義おと加ハ明世ハ徐道也云ふ
ハ寓作せ依神仙通鑑あると云ふ物をさす小引出て其證ハ備
すある倫も何るも傍痛き和らうとす三國志演義の説ハ吳
云しもの魏ハ楊脩と對問の條ハ脩又問曰蜀中人物何如松
曰文有相如之賦武有管樂之戈醫有仲景之能上ハ有君平之隱
九流三教出于其類拔乎其萃者不可勝紀豈能盡數也と云ふ
是あり此ハ蜀中の人物ハ盛ある由を古人の其藝ハ勝れ

る小比して云ふ語あるが上り作り誕あるを論ふ小足らば然依を方有執り傷寒條辨小張松北見曹操以其川中醫有仲景爲詩以建安言之則松亦仲景同時人と云ふは此演義小據て云へる説と聞ゆ神仙通鑑の説を其書小漢世ころの事を云ふ依所は元嘉辛卯冬桓帝感寒疾發熱不止大醫調治無效廣徵良醫傳驛有舉長沙太守張機深達軒岐起期召入病經十七日機診視曰正傷寒擬投一劑品味輒乃兩計密覆得汗如雨及且身涼留機爲侍中初舉陽廡公之傳見朝政日非曰君疾可愈國病難醫遂掛冠避去隱少室山著金匱玉函諸書陽廡公復來引去と云ふ是あり此をも證小引ける人あり笑ひ小堪ら然も有らむ張機字仲景と稱す依を何處のいり知る人あらむと云はむる此は葛稚川翁此從祖とある太極左宮葛玄字孝先也云ひし人のいおふ仙去せざる以前小神仙此方法を傳受して鑿方書字記せるなり其方書を即傷寒雜病論十六金匱仲景金匱あど何る是あり然る仙道此法小と至て實名其傳來せる由を末小云ふを見ゆし仙道此法小と至て實名

を易てわざと然依寓名字物して世小傳予あるなりそ有らる。葛孝先の神仙道を得る事を列仙通紀小引る吳書おし晉書小見え稚川翁の從祖多依事も晉書おし抱朴子小見え其傳此委き事を神仙傳おし葛仙公傳あど見えあり總糸て志都能石屋小考予記せ依字見るゆし其は稚川翁此神仙傳小老子の數名を稱せる由を解して老子數易名字非但一聃而已所以爾者按九宮及三五經及元辰經云人生各有厄會到其時若易名字以隨元氣之變則可以延年度厄今世有道德者亦多如此老子在周乃三百餘年之中必有厄會非一是以名稱多耳と何ぞ是を以て神仙の道小實名を秘して寓名を稱する法あ依事字辨ふゆし九宮三五經元辰經あど其子書内篇遐覽卷小其師鄭隱不就て覽る書目を多く擧ぐる中子九宮五卷三五中經一卷と見え元辰經は道藏目錄

小本命元辰曆とある書あるは、孝先翁固々有り有道此人、小し有まは。此道法、尔依りて、其厄會何し時、小始めて神傳の祕方を人間、漏し。名字字易て元氣の變り隨ひ、陰德此功業を遂ふる形也。

神仙此道、小は陰功を立る、いと專要と何る成業、小て其德を、行ふ趣、左手の爲と、ある、右手、小知、志め、交、右手の爲、也、ころ、左手、小知、志、免、交、と云、はり、里、小陰、了、物、を、依、行、形、る、が、故、了、陰、德、と云、小、其、行、以、趣、此、二、也、は、稚、川、翁、の、子、書、對、俗、卷、子、玉、鈴、經、を、引、き、て、爲、道、者、立、功、爲、上、除、過、次、之、以、救、人、危、使、免、禍、護、人、疾、病、命、不、枉、死、爲、上、功、也、欲、求、仙、者、要、當、以、忠、孝、和、順、仁、信、爲、本、若、德、行、不、修、而、但、務、求、玄、道、無、益、也、と、も、積、善、事、未、滿、雖、服、仙、藥、亦、無、他、也、と、も、微、旨、卷、了、自、非、積、善、陰、德、不、足、以、感、神、明、云、く、あ、と、も、見、え、此、不、の、神、仙、道、の、經、く、小、多、く、開、示、せ、里、

此仙翁此然る厄會有し、いと何を毛、
 了知、ちれば、傷寒雜病論、此自序、小余宗族素多、向餘二百、建安、
 紀年以來、猶未十稔、其死、凶者三分有、一、傷寒十居、其七、感往昔、

之淪喪、傷橫夭、之莫救、乃勤求古訓、博采衆方、云くと有、小て知、

 此、建安紀年、を、山田正珍、ぬしの傷寒論、集成、小、明、李濂、が、
 醫史、小、張機、字、仲景、漢、靈帝、時、舉、孝廉、官、至、長沙、太、守、と、云、
 る、を、引、支、す、由、是、觀、之、建、安、者、傳、寫、之、誤、也、若、彼、建、安、獻、帝、年、號、
 興、下、文、感、往、昔、之、文、不、合、也、考、後、漢、書、五、行、志、自、建、寧、四、年、至、先、
 和、二、年、相、去、僅、九、年、大、疫、三、流、行、與、所、謂、未、十、稔、之、文、合、若、符、契、
 と、何、事、と、非、ち、り、舊、の、お、く、建、安、小、て、宜、し、然、る、字、正、珍、ぬ、し、彼、
 醫、史、小、依、れ、る、也、此、ま、く、仲、景、の、本、傳、に、詳、ち、ら、ぬ、小、苦、み、て、ち、
 里、彼、李、濂、が、説、は、り、於、て、據、ち、き、杜、撰、を、拾、り、里、と、は、知、ら、れ、さ、
 り、し、然、る、は、建、安、元、二、十、五、年、續、き、あ、ゆ、か、後、漢、書、獻、帝、紀、小、建、

安二十二年是歲大疫と見え、其五行志、小も此事を載し、其註、
 小魏文帝與、吳質、書、曰、昔年疾疫、新故多、離、其、災、魏、陳、思、王、常、説、
 疫氣云、家、く、有、僵、尸、之、痛、室、く、有、號、泣、之、哀、或、闔、門、而、殯、或、舉、族、
 而、喪、者、と、云、子、里、即、ち、の、時、此、事、を、了、
 肘、後、方、有、る、稚、川、翁、の、語、
 尔、貴、勝、雅、言、總、呼、傷、寒、也、

俗號爲時行と見え千金方も小品方を引きて傷寒雅士之辭云天行溫疫是田舎間號耳とあれむ傷寒とは疫を云ふ至孝先翁を上古小謂ゆる葛天氏の末裔小て先祖より丹陽此豪族を承ぐ。稚川翁此父祖あち代々吳不仕子て大官を受さるしうは其宗族の多有れむと著く。於内篇道意卷小。吳太帝の時の事を記して。吳曾有大疫死者過半とも有る。孝先翁を太帝が招請をうけて其頃加しおる留めて在しうは建安紀年より其大疫此年おで小。其宗族此多く疫して死ありむ字。未十稔云くと云ふ至と聞也。是を毛て下文小。感往昔之淪喪云く。言語を結修る形り甚く符する小非也。紀年十二年爲一紀とも云へむ。建安の末年おろを廣く云ふ語あり。此を元年の事とて漢書武帝紀に元狩元年以天瑞紀元

とある字引きて説をある人あま非あり。此るは廣韻に紀極也會也と見え。己は從小字ある。豈元年小用以むや。然れば此を建安の末年頃より。故是を以て戴霸とも仲景をも。空云ふ義小見む小難あり。張機字仲景とを數名を稱し。漢長沙守とさる寓言して不分明しく。醫方書此事小就てを。滾く其實名を秘し。其徳功をのみ世小布分せむ形也。肘後序小。其名を云ふ。然るは隋書此經籍志小。張仲景方十五卷と有る。下小。仲景後漢人。梁有黃素藥方二十五卷。と註し。醫方論七卷と有る。下小。梁有張仲景辨傷寒十卷。療傷寒身驗方三卷。張仲景評病要方一卷。と註せるを思ふ。梁の七錄小。黃素方を仲景此書と爲さる。と著し。然れむ崔中書と云ふも。上小。論へる崔文子あらむ。孝先翁此寓名あらむも。知修らむ。新唐書に謝泰。黃素方二十五卷と有るは同名異書あり。其の上小。劉戴。秘要方と云ふも。小。此を形り。就て案小。劉戴。秘要方と云ふも。孝先翁の書小。非む。其の上小。案小。劉戴。秘要方と云ふも。評病要方。肘後百一方小。張仲景諸要方。形と名此似通以て聞

也るを思ふ唐し。張機と云ふ名を著せる書也。傷寒論の外。舊唐書、經籍志道家部。玄書通義十卷張機撰。まゝ新唐書神仙家部。亦かく見え。宋史藝文志。少其數名。此中。張氏張機金石制藥法一卷。亦見えあり。少其數名。此中。張氏をしも稱れる也。尼を免。古傳。此因縁ある事あるや。若く二十八宿。此中。張宿は主。天府飲食賞賚之事。又主。長。既く養萬物。と天文の書ども亦有る。譚。亦と依る事あり。既く戰國の時。范睢と云ひし人。魏國。亦て尼難。遭ける時。其處を遁れて名姓を更め。張祿と稱る。亦と史記に見え。漢王符が潛夫論。留侯張良。韓公族姬姓也。秦始皇滅韓。良弟死不葬。良散家貲千萬。爲韓報讎。擊始皇於博浪沙中。誤推副車。秦索賊。急良乃變姓。爲張。匿於下邳。云々。皇甫謐が高士傳。亦初良易姓。爲張。自匿下邳。云々。と有。亦思ひ合されあり。史記漢書の傳

姓とのみ有りて。毛也。姬姓ありしが。張と爲れる事は記さず。儲。亦此張良。亦と玄學。此偉人ありし故。亦其法を用ひて。張姓。亦は變れ。まゝ南陽としも云るは。彼處を殊。亦張氏多有し。其族姓の如く。以成して。實名を匿せる物あり。南陽。亦張氏。其事を。後漢書。張氏爲南陽族姓と見え。潛夫論。亦古より張。姓の多し。且し事を云ひて。至漢。張姓。多し。閭里無し。有。張者。と有。亦張機字仲景と稱せる。亦云。亦密。亦獄。亦非。亦説。亦此。亦名。亦姓。亦更。亦め。亦とら。亦を。亦し。亦云。亦余。亦意。亦得。亦説。亦此。亦名。亦姓。亦有。亦至。亦何。亦不。亦有。亦多。亦小。亦説。亦中。亦身。亦子。亦忍。亦者。亦の。亦姓。亦名。亦を。亦隠。亦して。張氏を稱る。事。亦記。亦世。亦物。亦あり。亦微。亦賤。亦の。亦者。亦を。亦廣。亦く。亦云。亦時。亦張。亦三。亦李。亦四。亦と。亦云。亦は。亦と。亦小。亦説。亦多。亦く。亦見。亦え。亦さ。亦り。亦張。亦を。亦師。亦説。亦の。亦如。亦く。亦李。亦は。亦老。亦子。亦姓。亦あり。亦多。亦く。亦此。亦二。亦姓。亦の。亦内。亦を。亦用。亦ふ。亦る。亦故。亦了。亦此。亦姓。亦の。亦人。亦を。亦出。亦自。亦混。亦亂。亦せる。亦り。亦轉。亦じて。亦無。亦名。亦徒。亦代。亦稱。亦と。亦爲。亦れる。亦存。亦る。亦傍。亦證。亦を。亦舉。亦て。亦云。亦は。亦む。亦小。亦晉。亦書。亦此。亦藝。亦術。亦傳。亦鮑。亦靚。亦字。亦太。亦玄。亦其。亦學。

内外を兼て。飢る時、白石を煮て食せしる事。載しる。小。稚川翁の内篇雜應卷小。以引石散方寸匕。投一外。白石子中。以水合。煮之。立熟如芋子。可食。以當穀也。張太玄舉家。及弟子數十人。隱居林其山中。以此法。食石十餘年。皆肥健。と記せり。鮑靚を孝先翁。此弟子。小。て。稚川翁の婦翁あり。是。小。有。道。此。人。亦。依。故。小。亦。れ。も。姓。を。易。て。張。氏。を。稱。せ。依。り。て。即。そ。此。師。の。道。小。依。れ。る。形。也。鮑靚。小。前。生。了。曲。陽。の。李。家。此。子。亦。里。し。が。九。歲。の。時。余。并。小。堅。て。死。し。る。事。を。覺。え。居。て。五。歲。の。時。小。父。母。不。識。ま。依。人。亦。り。稚川翁の婦翁。此。依。り。と。稚川翁。此。本。傳。小。鮑玄。亦。内。學。逆。占。將。來。見。洪。淡。重。之。以。女。妻。洪。也。有。り。て。知。信。し。内。學。と。を。神。仙。方。術。の。學。を。云。ふ。此。小。對。し。て。儒。者。此。學。を。は。外。學。と。云。ふ。鮑靚。此。傳。小。學。兼。内。外。と。云。ふ。是。即。そ。を。兼。し。依。り。由。亦。り。神。仙。導。卷。の。學。を。内。學。と。稱。す。る。亦。甚。古。き。事。亦。り。故。了。加。の。素。問。靈。樞。を。も。内。經。と。は。云。亦。り。然。る。字。佛。法。渡。里。て。後。小。佛。法。者。を。此。語。字。

竊して佛道を内と稱し他の道字外道と云ふ。此。亦。因。小。誤。り。驚。か。し。置。あり。或。て。鮑靚が孝先翁。此。弟。子。形。依。こ。也。何。を。以。て。知。る。ま。は。神。仙。傳。小。孝。先。翁。の。仙。去。ま。る。時。の。事。を。記。し。て。語。弟。子。張。太。言。曰。云。く。也。亦。り。言。は。玄。と。音。近。き。が。故。了。相。通。じ。て。書。し。依。り。お。と。字。形。の。相。似。と。れ。を。寫。し。誤。れ。る。り。何。小。も。謂。ゆ。る。張。太。玄。亦。る。也。也。疑。ふ。し。人。名。の。字。音。亦。て。異。字。を。書。し。る。例。亦。下。小。舉。依。葛。奚。を。葛。系。と。も。書。き。華。陀。が。名。を。も。馳。と。も。他。也。毛。書。亦。る。亦。と。上。小。引。し。る。書。等。の。亦。と。し。古。く。は。亦。不。例。數。亦。五。儲。新。唐。書。子。類。部。了。張。太。玄。平。臺。百。一。寓。言。三。卷。の。目。亦。り。鮑。玄。此。撰。亦。る。り。孝。先。翁。を。吳。太。帝。が。赤。烏。七。年。八。月。小。八。十。一。歲。了。て。仙。去。し。亦。を。謂。也。依。て。蜀。後。主。が。延。熙。七。年。魏。齊。王。が。正。治。五。年。小。當。れ。也。此。年。亦。少。八。十。一。年。亦。上。也。考。亦。る。り。漢。桓。帝。が。延。熹。七。年。此。生。れ。小。て。彼。建。安。亦。三。十。歲。餘。了。五。十。六。十。歲。了。亦。近。き。亦。て。の。間。形。王。建。安。紀。年。と。云。亦。り。亦。く。符。子。依。字。思。亦。亦。し。孝。先。稚。川。此。二。翁。と。

毛公九十八十一歳にて仙去せるを由ある事あり志都能石屋に云ふ事見傳し。鮑靚を東晉比明帝が世頃す。百餘歳にて仙去し於ては彼赤鳥七年の頃は鮑靚二十歳をり至の時亦當れ至然れを此年頃も亦能く符合す。孝先翁を左慈字元放此弟子あるが左元放を建安の末年頃小仙去せり然る小仙傳類の書とも小鮑靚を元放の弟子ありを云ふ説あれど鮑靚を魏文帝が黄初五年頃此生れと聞ゆは元放の仙去せるより至十年をり至後ある故小時代合はを此を孝先翁を師とせる事を認めれり説あり右此人の生年亦其終至此年頃の事と志都能石屋に諸書を引て考證して孝先翁の醫方術小精練あり至し事を其傳せる事見傳し。して孝先翁の醫方術小精練あり至し事を其傳小常服餌亦尤長於治病鬼魅皆見形或遣或殺能絶穀連年不饑と有る明あり。神仙中治病的術を知らる一人も有也記せるは稚川翁の密子潭く思ふ旨は有れをあり諸寓名を用ひざる以前此撰と聞えて隋志小孤剛子萬金訣二卷

葛仙公撰と見え唐書小葛仙公録孤子方金訣二卷とあり宋志小葛仙公杏仁煎方刪繁要略方集諸要妙方備急簡要方纂驗方養性益壽備急方奏聞單方反魂丹方玄明粉方療癰方方など各一卷の日あり凡て藥石方術の書と聞えたり。して其仙去此以前小從弟葛奚小真道未絶吾昇舉之後當生屠哲雅素通玄之子。避世高尚曠志清虚振起仙裔矣と云有りしが。果して葛奚の孫小稚川翁を生せり。此事を列仙通紀小見えあり奚を晉書には系とあり。葛奚此子を葛憐と云ふ其子は即稚川翁あり是を以て孝先翁を吾が從祖と云有り但し葛奚小遺言のあと神仙傳小載ざるを吾が事をあきき小云ひ遺せる。おと其仙去此語ありはあり然る事幸しして通紀に殘れり。時小鄭思遠張泰と云ふ弟子等小神仙此秘經を付與して。吾昔從左元放先生受今付汝等九天禁重勿示非人。若有至心之士傳授と言を遺せる事もあり。凡ちら也神仙翁あり

有^レ以^レ依^ル。此事も通紀に見えし^レ。鄭思遠^ト晉書に鄭隱^トあり。思遠^ト其字あり。即^チ稚川翁^ト此子書^ス。吾師鄭君^ト云^ハ此^レ是^レあり。張泰^トは波めて鮑靚^ノの寓名^ヲ了^テ。張泰^ノ字太玄^トと稱^シして字^ヲをば其儘^ニて。姓名^ハより里^ヲを易^シし^ル。但^シ雲笈七籤^ニ引^クる道教相承錄^ニも張泰^トと然^レれを稚川翁^ノの内學歟^ト所^リ有^ル。然^レれを泰^ト誤^ル字^トあり。鄭思遠^ニ金丹^ノの法^ヲを授^ケる。諸^レ此^ノ秘術^ヲを授^ケる。鮑太玄^ハは。方^ニ此^ノ術^ヲを受^ケる。其^レ本傳^ニ。從^テ祖^ト玄^ト。吳^ノ時^ニ學^ブ道^ヲ。得^テ仙^ノ號^ヲ。曰^ク葛仙公^ト。以^テ其^ノ煉丹^ノ秘術^ヲ授^ケ弟子^ト鄭隱^ト。洪^ノ就^テ隱^ノ學^ヲ。悉^ク得^テ其^ノ法^ヲ焉^ト。後^ニ以^テ師^ト事^フ南海^ノ太守^ト鮑玄^ト。洪^ノ傳^ニ玄^ノ業^ヲ兼^テ綜^テ練^テ醫術^トと載^スあるを以^テ知^ル。鮑玄^トは即^チ鮑靚^ノ字^ト太玄^ト也^ト云^ハふを略^シて云^ハふ。顔回^ノ字^ト子淵^トを顔淵^トと云^ハふ。宰^ノ予^ノ字^ト子我^ト宰^ノ我^トと云^ハふ。類^ニも外^ニも有^ル。少^ク孝^ノ先翁^ノの藥石^ノ方術^ヲかく由^リ來^シて。稚川翁^ハ傳^テ多^ク依^ル。孝^ノ先翁^ノを此^ノ仙^ト去^リの以前^ニ。藥石^ノ此^ノ方書^ヲをば。既^ニく

世^ニ小^レ顯^ルはし傳^テ多^ク有^ルる。其^ノ顯^ハし^ル年頃^ハ。加^テ形^ラむ。紀^ノ年^ハ以來^ニ猶^モ未^ク十^ニ檢^スと。是^レを以^テ晉^ノ世^ニ初^メ。皇甫謐^ハれ^テ見^ル有^ル。小^レ推^シ量^ラら^レる。是^レを以^テ晉^ノ世^ニ初^メ。皇甫謐^ハれ^テ見^ルて。其^ノ釋^ノ觀^ノ文^ニ。仲^ノ景^ノ垂^テ妙^ヲ於^テ定^メ方^トとは記^セるあり。然^レも右^ノの謂^ハあ^リ故^ニ。其^ノ方書^ニ此^ノ名^ヲをも種^々小^レ題^シ。撰^者の^ノ名^ヲをも戴^テ霸^トとも仲^ノ景^ノ也^ト。張^ノ機^トとも著^シて紛^ニ錯^スし^ル也^ト。方書^ニ此^ノ名^ヲし^ル事^ハ。推^シ川翁^ノ此^ノ書^ニ等^シし。仲^ノ景^ノの金匱^トと有^ルるを傷寒論^ノの自序^ニ。は傷寒雜病論^トとあり。隋^ノ書^ニ此^ノ經籍志^ニ。張^ノ仲^ノ景^ノ方^ノ十五卷^ト。療^ノ婦^ノ人^ノ方^ノ二卷^ト。梁^ノ書^ニ張^ノ仲^ノ景^ノ辨^ノ傷寒^ノ十卷^ト。黃^ノ素^ノ方^ノ二十五卷^ト。傷寒身^ノ驗^ノ方^ノ三卷^ト。評^ノ病^ノ要^ノ方^ノ一卷^ト。唐^ノ書^ニの藝文志^ニ。張^ノ仲^ノ景^ノ藥^ノ方^ノ十五卷^ト。傷寒卒病論^ノ十卷^ト。と見え。肘^ノ後^ノ百^ノ一^ノ方^ノは張^ノ仲^ノ景^ノ諸^ノ要^ノ方^トと云^ハふ。猶^モ有^ルる。其^ノ書^ニも此^ノ中^ニ。張^ノ仲^ノ景^ノ方^ノを皇^ノ國^ノも早^ク傳^ハは^レり。寬^ノ平^ノ此^ノ頃^ニ。藤^ノ原^ノ佐^ノ世^ノ朝^ノ臣^ト此^ノ錄^ヲせる。見^ル在^ル書^ノ目録^ニ。張^ノ仲^ノ景^ノ方^ノ九卷^トと載^スる。若^クは缺^ク卷^ヲありし。惜^シき。其^ノ本^ハ今^ニ世^ニ見^ル在^ル。宋^ノの藝文志^ニは張^ノ仲^ノ景^ノ脈^ノ經

一卷張仲景傷寒論十卷金匱要略方三卷張仲景撰王叔和集
張仲景療黃經一卷又口齒方一卷金匱玉函八卷王叔和集
と云此方書とも魏晉の世頃小既^レ不^レ流布して醫家小も廣く
其方劑を用ひ多^レし故^レ也。稚川翁此内篇至理卷^ニ。今醫家通
明腎氣之丸^ヲ。内補五絡之散^ヲ。黃耆建中之湯^ヲ。將服之者皆致肥^リ。
とも。理中四順救霍亂麻黃大青主傷寒俗人猶爲不然也^ナ。
毛有^レ至思^ハ以合^ス也^ナ。此はみ^テ金匱傷寒論^ニ載^レ不^レ載^レ方
を肘後方^ニ載^レあり^ニ。此を四逆湯と反對^シあり^ニ。妙方^ナなり^ニ。ま
大青とを大青龍湯の事と聞^ケれ^ド。若くは肘後方^ニあり^ニ。大青
湯^ニあり^ニ。も知^レたり^ニ。其^レま^ニ傷寒を治^スる^ニ良方^ナなり^ニ。は
至^レ此等の藥方^ニ。是^レより以前の書^ニ。小所見^スる^ニ事^ナあり^ニ。古今の醫
學家^カ。か^レる^ニ事^ナ。論^ト。かく^レ如^ク世^ニ弘^メては有^レれ^ド。其實
小無^キを何^カ小^カを^カ。かく^レ如^ク世^ニ弘^メては有^レれ^ド。其實
名^ニは蘊^ミ秘^シして在^ルる^ニ故^レ也。其張機字仲景と云ふ^ニ。何^カを

る人とも。世^ニ小知^ルる^ニ人無^シし故^レ也。史籍^ニ傳^ヘる^ニ由^リ。
此陰德を行^フ神仙道の本意^ニして。稚川翁^ニ。此はち其法
を守^リて。其實名を顯^スさ^レ。其寓名を用ひて。戴霸とも仲景と
も稱^スる^ニ。故^レ也。後人^ニ。據^ルも^レ。於^テ傳^ヘる^ニ。建安紀年^ニより。今
吾^ガ文政九年^ニまで。千六百^ニあり^ニ。數十年^ニ。其^レ實名陰德^ニ。顯^スル
是^レ有^レる^ニ。依^テ。然^レれ^ド。今^ニ。かく^レ其^レ實^ニを顯^スる^ニ。事^ナ。謂^フる^ニ。神仙の機
罪^ニ得^レ。修^スき^ニ。わざ^ニの^レ。お^ト。所^ニ思^フ。小^カ。今^ニ。お^ト。案^ニ。ふ^シ。そ^レは。猶^モ。い^ハ。お^ト。
神仙道を成就^スせ^シ。さら^ニ。を^レ。開^ス。あ^リ。其^レ陰德^ニ。小^カ。賴^ス。至^リ。其^レ仙位^ニ。小^カ。至^リ。
る^ニ。法^ニ。小^カ。し^テ。有^レ。れ^ド。憚^ル。り^ニ。後^ニ。學^ニ。の^レ。そ^レ。道^ニ。を^レ。執^ス。徒^ニ。として^ハ。二
位^ニ。至^リ。至^リ。て^ハ。有^レ。き^ニ。ば^シ。今^ニ。後^ニ。學^ニ。の^レ。そ^レ。道^ニ。を^レ。執^ス。徒^ニ。として^ハ。二
翁^ノ。恩^ニ。賴^ス。を^レ。え^シ。知^ル。ら^ニ。也^ナ。世^ニ。は^シ。醫^ニ。學^ニ。者^ノ。あ^リ。之^レ。の^レ。作^ス。出^ス。る^ニ。妄^ニ。說^ニ。
を^レ。聞^ク。小^カ。堪^レ。ず^ニ。を^レ。畏^ル。れ^ド。考^ヘ。ハ。の^レ。及^ブ。限^ニ。至^リ。を^レ。其^レ德^ニ。を^レ。顯^ス。を^レ。し
て^ハ。恩^ニ。賴^ス。を^レ。辱^ス。る^ニ。事^ナ。を^レ。吾^ガ黨^ニ。小^カ。告^ス。後^ニ。上^ニ。引^ク。皇甫謐
く^レ。所^ニ思^フ。て^ハ。かく^レを^レ。顯^ス。は^シ。記^ス。る^ニ。也^ナ。至^リ。上^ニ。引^ク。皇甫謐

して實是感慨憤激之所發所謂披心腹吐情實者非後人自序其書以希售者比也。程應旌云古人作書大旨多從序中提出。故善讀書者未讀古人書先讀古人序。從序法中讀及全書則微言大義宛然在目。余讀傷寒論之自序竟是一篇悲天憫人文字。從此處作論蓋即孔子懼作春秋之微旨也。と云。尚也然當言あり。かくて此集成小七徵を擧て其攬入文を刪する説ども大概を宜しきと猶盡さるる説あり下り辨ふる字見る傍し。そもく稚川翁此鑿學は孝先翁此學を傳來せ協が故小其子書小鑿事を談れる語とも傷寒論の自序を敷延せる説多く。文法およ甚類せり。故今その正文を擧て稚川翁此子書小鑿事を談れる條くと相應を依事とま字分注して證さむとに。

但し其分註せる文をありし事と何る語をのみ擧論曰余毎記せるあと云々も更あり。然くも本書を見傍し。覽越人入虢之診望齊侯之色味嘗不慨然歎其才秀也。越人とは扁鵲の名あり。此二事とも小史記の扁鵲傳に見えたり。稚川翁は越人此術を稱歎せるあと其子書子往く見ふる中子廣譬卷小絶明者觀機理於玄微之味形故越人怪當今居世之士曾見齊桓不振之徵味覺之疾云々と云子り。不留神醫藥精究方術上以療君臣之疾下以救貧賤之厄中以保身長全以養其生。集成子醫藥方術互文言之と解されど鑿治る是古の道あるが方術を本りて鑿藥を末あり其に至理卷子越人救太子於既殞胡巫活絶氣之蘇武此醫家之薄伎猶能若是豈況神仙之道と云い道意卷小要於防身却害當修守形之防禁佩天文之符劍耳然思玄執一合景環身可以辟邪惡度不祥而不能延壽命消體疾也任自然無方術者味必不有終其天年者也。然不可以值暴鬼之橫枉大疫之流行則無以却之矣。夫儲甲冑蓄叢莖者蓋以爲兵爲兩也。若幸無攻戰時不沉陰則有與無正同耳。若矢石露合飛鋒烟交則知裸體者之困矣。

洪兩河傾素雪彌天。則覺路立者之劇矣。不可以誤晚學之後人。謂方術之無益也。と有を以て知べし。亦未小論。亦未見也。但競逐榮勢。企踵權豪。致々汲々。惟名利是務。崇飾其末。忽棄其本。華其外。而悴其內。皮之不存。毛將安附焉。勤求卷子。凡人之所汲々者。勢利嗜欲也。苟我身之不全。雖高官重權。金玉成山。妍艷萬計。非吾有也。是以上士先營長生之事。長生定。可以任意。若妹昇玄。夫世可且。坤仙人間。若彭祖老子。止。人中數百歲。不失人理之權。然後徐々。卒然登遐。亦盛事也。然決須好師。師不足奉。亦無由成也。と有至。遭邪風之氣。嬰非常之疾患。及禍至。而方震慄。降志屈節。欽望巫祝。告窳歸天。束手受敗。齋百年之壽命。持至貴之重器。委付凡醫。恣其所措。咄嗟嗚呼。道意卷小。勞逸過度。而碎首。以請命。變起膏肓。失節而委禍於鬼魅。俗所謂率皆妖偽。轉相誑惑。久而彌甚。既不能修療病之術。又不能返其大迷。不務藥石之救。惟專祝祭之謬。祈禱無已。問卜不倦。巫祝小人。妄說禍祟。疾病危急。富室竭其財儲。貧人假舉。倍息田宅。割裂以訖。盡云々。雜應卷小。醫多承襲。

世業有名無實。但養虛聲。以圖賤利。寒白退士。所不可得。使使之者。乃多誤入。使腰理之微疾。成膏肓之深禍。乃至不救。自開其要。勝於迎無智之醫。云。厥身已斃。神明消滅。變為異物。幽潛重泉。徒為啼泣。痛夫。舉世昏迷。莫能覺悟。不惜其命。若是輕生。彼何榮勢之云哉。勤求卷小。深入九泉之下。長夜罔極。始為螻蟻之類。終與塵埃合體。令人怛然心熱。不覺咄嗟。若心有求生之志。何所不棄。置不急之事。以而進。不能愛人。知人。退不能愛身。知己。遇修玄妙之業。哉云々。災值禍。身居厄地。蒙々昧々。蠢若遊魂。哀乎。趨世之士。馳競浮華。不固根本。忘軀徇物。危若冰谷。至於是也。雜應卷小。但患居人間者。志不得專。所修無恒。又苦懈怠。不勤。故不得。不有疹疾耳。若徒有信道之心。而無益已之業。年命耗孤。虛之下。體有損傷之危。是以古之初為道者。莫不兼修醫術。以救近禍。焉。凡庸道士。不識此理。恃其所聞者。大至不關。治病之方。又不能專行內事。以却病痛。及病無以攻療。乃更不知。凡人之專湯藥者。所謂進不得。那。余宗族素多。向餘二百。建安

紀年以來。猶未十稔。其死也者。三分有二。傷寒十居其七。感往昔
之淪喪。傷橫夭之莫救。乃勤求古訓。博采衆方。爲傷寒雜病論合
十六卷。此文の義を既小論すゆき。但し原本小博采衆方と云
平脉辨證といふ語はれと。此に王叔和此本論より已に撰入せ
る文は張本にせむと加筆せる文ありと。金匱玉函方なる
小序の初發を易とる小思ひ合せても知べし。然るは本論の
正文を熟く察する。序よりかく云はる。然る書等此説を撰用
せぬ方法も有る。無く能く此等此書は符王と見ある説と
も。吾も人も撰入文と見渡めらる。文のみあり。委くを予
が別は撰入傷寒論考。雖未能盡愈諸病。庶可以見病知源。若
能尋余所集思過半矣。此より下は夫天布五行云々と云ふ長
係王叔和撰次之語。非仲景氏舊也。諺所謂貂不足狗尾續者已
何者思過半句。既爲一篇結尾。而復別起一段議論。是微一也。云
云と七徴を擧て辨じたる。六徴を空ありと。此第一徴也。云
寧らに其を下文の下より引く。稚川翁の文を見て知度し。玄冥

幽微變化難極。自非才高識妙。豈能探其理致哉。集成より此文を
を非あり。此を上小尋余所集思過半矣。と遜退の辭を用ひ。其
意を返して。玄冥幽微の極め難き變化。不到至る。才高く識
の妙なる人。非才て。豈よく其理致を探らむやと。我々淺
陋。亦由を述て。上より越人を稱して。才秀と云ふりし語を結
ばる。文あり。此に稚川翁の子書に自序に未だ。麤言較略。以示
一隅。冀能慎之。徒省之。可以思過半矣。豈爲暗塞。必能窮微。暢遠
乎。云々とあると。意を異は。是る余が信する所也。正文に依其
論おらび。文法も。稚川翁の子書と。符節を合せあるが如し。
豈こは小縁の事あらむや。此は幽き由ありて。孝先翁に名字
ある稱は。孫實を其方法を祖述せるが故あり。然る有れど。雜
金匱と云ひ。肘後方は。序より仲景金匱と書き。異名同人を
相違せしめ。其玉函方に至る。其藥石を諸仙の所造と云ひ。
神仙傳より。鮑靚を張太玄と書き。其由を云ひ。孝先翁より。長於
仙傳。鮑靚を張太玄と書き。其由を云ひ。孝先翁より。長於

治病と載して其意を寓し其方書此古名を用ひ抄く其人此
傳を記さば其書子金匱玉函方と號けて謂ゆる金匱玉函の
秘せ也世亦布行し與る法引きて放之矣千載の後小思
あて之を索隱せしむる法此まに神仙道此幽き辭ある
事あるも明の趙開美本の金匱要略を原元の鄧珍が序は
鄧珍群隱を索めて善本を得ざるを辨小勸して弘む由を
云いて張茂先嘗言神物終當有合是書也安知不有所待而合
顯於今也故不敢秘特勸諸梓與四方共之也云云有る意は可い
さく無小しも非也此有れ加へる語はし凡醫輩此上
此真鑿道之情なき際は馬耳風小見過してぞ有めり此上
件の方書とも此今小傳は至多依由來此大概を上小言可依
如く其方論も之神仙と出で孝先翁小傳は至孝先翁は
免之を方策小記載して金匱とも傷寒雜病論とも張仲景
藥方也も張仲景方とも張仲景諸要方とも號あるが此の諸
出所を既小注すれを今更に云ふに不辨傷寒傷寒身驗方療
婦人方評病要方など此目あれど此等を其全書の名ならん

聞ゆれを今論ふらぎり小非也少て初發小出せる稚川翁の
本傳小金匱藥方とある名を即孝先翁の方書此名を其儘小
用ひしとる違ふき出と今舉る目小金匱と題せる方書を張
金匱とも藥方也も有るに知候し太玄と至稚川翁小傳は至傷寒雜病論を題せ依以下は早く
魏晉此間より世に流布してぞ在り是を以て梁の陶弘景
と引きて隋志小張仲景方と擧げ其世の藥元方が病源假論
引きて其方を仲景とは稱さ小を書中仲景義最玄深非愚
淺能解と云ふれ元方が此を見ざる事も知らる此後
の物も往くを其名と毛見えと至中小も傷寒論
此名高く聞えて唐世までは全く傳はり來り至然れども
千金秘要方小江南諸師秘仲景傷寒方法不傳を云ふ是を此
を記せる頃まで未其書をば見ざるしと聞ゆるを後小其
翼方を著せ依り其九十一卷小仲景方を收め依り出さ
思ふは思邈も晚年不及至てを見る事を得ありむ出さ
其天寶中小王焘が著せる外臺秘要方了出張仲景傷寒論と

いふ方薬を多く載ふるが。其方法大なり。今傳はる金匱玉函
要略ある。方論小符ふを觀れば。王燾その原本此傷寒雜病論
あり。采り載ふる物あり。論あり。然るも其のち。其雜病篇
みあり。ハ失せて。傷寒篇のみ傳はる。今存傷寒論十卷を
あはち是なり。唐より後には。全書傳をらざり。と云ふ。其
雜病論合十六卷。今世但傳傷寒論十卷。雜病未。斯て雅川翁小
傳はれる。金匱と題せ。方書は。雅川翁それ小。諸家此方をも
増益して。百卷を成して。金匱藥方とも。玉函方をも。金匱玉函
方とも。題ふる字。但し其百卷を。肘后方は。自序小。非有力不能
由れと。其子書外篇を。五十卷に著せし。有る本。今傳ふる
を觀る。不自叙。卷とも。五十一卷あり。刊本四冊。十行二十字

小書きて。二百十張あり。其卷を分てる中。小は。一冊小。足
さるを。一卷とせ。るが。あり。此は。準ずて。思ふ。小。百卷とあり。玉
函方の。卷帙も。大抵。推量られ。あり。神仙傳十卷。内篇二十卷
と云ふも。大抵。それ。倍せ。依。一卷あり。然れ。其。百卷を。その
子書全部。存。依。卷帙。多。り。然。見。其。此。は。今
存。傷寒論。金匱要略。を。合。せ。て。は。然。し。も。甚。多。き。缺。は。非。じ。と
を。思。ふ。そ。を。隋。志。に。雅。川。翁。の。書。小。玉。函。煎。方。五。卷。と。い。ふ。目。あ
り。東。晉。此。末。小。王。叔。和。出。て。そ。此。百。卷。を。更。あり。原本の傷寒
雜病論をも得て。其原本を撰次し。金匱玉函方をば要略して。
世小弘通せる物ある。と。上小論するが如し。其原本を彼が
今存傷寒論の初。晉太醫令王叔和撰次とあり。玉函方字
要略。世依事。今存依要略方。亦。晉太醫令王叔和集とあり。
小。て。始。め。て。世。小。出。る。と。上。小。云。ふ。が。如。し。然。し。て。其
要略撰次。世依時しも。已。が。例。此。脈。經。風。有。臆。説。を。多。く。撓。入

して張仲景小誣とる小を有り依。序あれむ云ふ。加の脈經と
きて王叔和が説と見ゆ依限りも見るも足さる愚説とも小
て其古人の名を稱せるも偽托多し用ひし正脈十小過ぎ依し
實小仲景此診脈法を其正文中小考ふるも正脈十小過ぎ依し
其則の皓手とる依と青天白日此如く依手王叔和その旨
を得知らば然る愚説をば物せざる也然る小傷寒雜病論此雜
也より此を別小辨論せ依を此有り。然る小傷寒雜病論此雜
病篇を早く凶ひ。金匱玉函方の傷寒篇を宋此林億等小斷棄
られて二書共ふ多く缺逸あれど其遺佚を合せてまよ彼金
匱玉函經と題せる本よと諸書小引多依文字校し然して王
叔和が攬入を刪去する時を再神仙の方法。二翁此鑿術此眞
面目を毛知らる事あり。まよ於き鑿道此賜物あり。然れむ
其字傳子と依王叔和が功も少く無小し毛非也。かの金匱玉
函經と題せ

る本も晉王叔和撰次と有て攬入もよと多し。まよ案ふり此也。
雅川翁此金匱玉函方あり。傷寒篇を別あり故小其名を用ひ
さゆと見も。そは傷寒雜病論の傷寒篇を別と依と例あり。
然れど其を唐以前の事と見え。外臺祕要小其名見え。まよ
りて林億が此經此疏小細考前後乃王叔和撰次之書。緣仲景
有金匱錄。故以金匱玉函名取。實而藏之義也と云ふれど其名
を雅川翁の負けとる。りて彼要略本あり。雜病篇とも。其攬文
を去りて。孰くそ此正文を察る。信小金匱玉函了。祕藏を序
き方論あるまよ。言ふも更な依が。何の篇も。王叔和小略せら
れし條多く。方法足らば遺憾きを。此は加此肘後救卒方を
採りて補佐と爲依し。此方書を撰はれし旨趣を發端小そ此
抑出の方書此名字。本傳小は。肘後要急方中。あ依字。自序の文
小を。肘後救卒と稱し。題名了。肘後備急方とあり。諸書小肘

後方とも卒救方也毛有るは其稿本小名を種く小題し置れ
る傳はるる物あり。お著述を以て任むる人た誰も其覺
傳はるる見在書目錄に葛氏肘後方一卷葛氏肘後方三肘後
百一方九肘後方九ちど見え和名鈔小葛氏方とて引きよる
も是ちる傳し其本 此書字採用する就ては殊小心得
と毛今傳をらば。然るは此書もや三卷有りて。稚川翁の撰集
せ傳あり。齊と云ひし世まで。二百年餘に傳はる來しを其世
此廢帝が永元二年也云ふ年小。陶弘景と云ひし人其本字得
る。此人まの神仙道此人もて號を隱居と云ふりし故
陶隱居と云ふ。梁史いふ代おで世に在し人ある故
存傳てを梁人史云あり。十歳此時小。稚川翁の神仙傳を見て
是より道小入り種くの著述ある中にも真話名醫別錄字始
め有用の書と毛多有り。委くを八十六篇有りるを熟檢する
志都能石屋に記せるを見傳し。

小一條するべき篇の二條と成れる類にも多有し。其錯
亂を訂正し其配合を傳きを配合銓次せ傳小。七十九篇と成
れ置し。尚別小二十二篇字添子合せて百一篇を成して肘
後百一方と號けて。舊此如く三卷と爲し其添する方ともは
朱書を以て甄別せり。とそ當時既小錯亂して寫し傳ありし
形也。此は陶氏の凡例に尋葛氏舊方至今已二百許年。播於海
於内。因而濟者其效實多。余今重以該要。庶亦傳之。千祀豈止
於寧。衛我躬乎。といひ。舊方都有八十六首。檢其四蛇兩犬。不假
殊題。喉舌之間。亦非異處。入塚御氣不足。專名雜治。一條猶是諸
病部類。強致殊分。復成失例。今乃配合爲七十九首。於本文究具
都無付。減復添二十二首。或因葛一事。增構成篇。或補葛所遺。準
文更撰。具如後錄。復勞在傷寒前。霍亂置耳目。後陰陽之事。乃出
雜治中。兼題與篇名不盡相符。卒急之時。難於尋檢。今亦改其銓
次。庶歷然易曉。ま其自序小。抱朴此製實爲。漢益然尚。關漏味
盡。輒更採集補闕。凡一百一首。以朱書甄別。爲肘後百一方。於雜

病單治略爲周遍矣。太歲庚辰と記し。およ凡例小。今以內疾爲
上卷外發爲中卷。他犯爲下卷。上卷三十五首。中卷三十五首。下
卷三十一首と云。右。此齊北永元二年と云。六百年は。右有
小據りて記せり。宋と號ひし世小。僭號して遼と稱せる國也。乾統と云し年
間小。始めて板子刊ある本此有しを同じ宋世小僭號して金
と稱せる國也。皇統四年と云。右。宋在此時高宗と云。紹興十四年と云。右
年子當。揚用道と云ふ者。出れ字得て。およ諸書と云。同類の方
れ。右。を撫ひ采。右。附方と爲し。此を附廣肘後方也。名けあり。揚用
道。序小記せる趣小據て云。然る。其後世。此亂れ。其本
あり。委くは本書と見。右。およ。湮没して絶。右。如く。人知らむ。成。右。元と號ひ
し世の。至元二年と云ふ年。鳥侯也。いふ者。偶。右。字得て。

珍重して板小刻と依字。右。段成巳といふ人の序小記せる
至元二年まで。其間百。明。世小。萬曆三年。を刻。改
二十年餘。を歴。右。免。今。世。有。本。此。原本。有。て。其。上。小。云。右。依。如。く。彼
揚用道。が。支。度。此。本。有。右。今。皇。國。の。坊。間。小。行。は。る。右。所。の。板。本
と云ふ人。此。校。合。して。聯。右。本。有。る。右。香。川。修。德。が。門。人。沼。晉
其。校。合。い。中。踈。し。其。心。し。て。見。辨。ふ。後。し。右。儲。お。於。如。此。く。此。書。此
由。來。を。糾。し。置。て。あ。く。小。其。本。文。を。論。ふ。後。し。其。は。ま。於。陶。弘。景
が。校。合。し。多。量。し。時。也。雅。川。翁。在。世。間。の。頃。と。云。僅。右。二。百。許。年
を。歴。し。る。右。然。は。り。至。錯。亂。何。れ。し。事。は。既。く。寫。し。誤。め。多。量。し
物。有。り。右。雅。川。翁。の。撰。述。せ。る。時。小。陶。氏。が。云。は。然。依。を。陶
氏。が。淡。く。惜。み。て。校。合。増。補。せ。依。よ。量。遼。の。乾。統。年。間。小。板。子。刊

るおと數十所小見え多依を陶氏が朱書を墨書小替する後
は葛方陶方そ此甄別詳あらけり故小後人多く他亦據あ
りて其甄別の知られざる限をば傍り其姓字字標して自己
此記號と爲する本を後小過りて本文イ寫し入するあり古
小さる例いとまじ中尔何くれを法語を記して餘具大方中
多き事あり。まじ中尔何くれを法語を記して餘具大方中
お多某く諸湯及某く諸散並有大方中お多有鎮心定氣諸丸
在大方中まじ宜按大方非單方所及るを云るを素より陶氏
此文おて此は肘後方此單方ある小對してそ此效驗方ある依
を大方と云る依形に其は自序に余別撰效驗方五卷具論諸
病證候因藥變通而並是大治非窮居所資若華軒鼎空亦宜修

省耳と云るを以て知候し。稚川翁の肘後方を撰候るも元よ
函此事非有力不能盡寫といひ肘後救卒三卷此事多
易得之藥其不獲已須買之者也亦皆賤價草石所杜皆有云
凡人覽之可了其所用或不出垣籬之内顧眄可具云と有
て知らる蓋そは諸神仙の本意を承て孝先翁の方書に載ら
れざる方法此例を祖述せるあり然るを彼傷寒金匱ある正
方此多くを單方とも云はる至り少味あり十味以上於依を
一方も有ること無く其藥石を以て得易く賤價ある物等を
思ふ候し然れを彼二書に攙入を始め諸書に得易からぬ藥
石を用いしとる十味以上の藥方に仲景方と云る依が多かる
は皆後人の妄説ある事辨ふ候し但しそは其方の十味以
上於依あり藥石に貴賤を以て知のみあらぬ其方を組に依
趣まじそ此分量藥製此趣あるを察ても眞偽を直に知る
事あると其は此小盡し難しかくて彼此思ひ合するや稚川
翁の肘後方手撰ぶに右の如く撰りられし事は孝先翁此方
書に於る古例に依り是ら肘後方を採用せ候き要語あるは此
旨を得て其方法を撰びて傷寒金匱小缺あるを補ひ尚足さ

協を。千金外臺を始め。後世此方書の。よく古法小合ふ方論字
撫いて。採用する。を。醫方學の要務なるべき。然れども慢り多
そは。獨嘯菴の。説。事。於古醫道者。未だ多讀書。枕一傷寒論
足矣。と云。多る。然る。事。ある。れ。と。古方は。多く。缺失。する。が。故。小其
遺逸。せる。方法。を。他書。小。撫。は。む。有。傍。り。ら。又。但。し。此。を。西。戎
小傳。は。此。流。方法。の。論。は。あ。る。有。世。本朝。小傳。を。述。る。神。方。の。事
を。於。て。也。殊。に。傍。尊。き。來。由。あり。て。門。人。或。人。此。説。を。聞。て。詰。り
松浦道輔。が。傍。き。記。せる。物。と。も。有。也。
らく。雅川翁。此。文。を。觀。ゆ。ふ。救。卒。方。を。凡。人。の。爲。小。撰。び。金。匱。玉
函。方。を。醫。人。の。爲。小。撰。を。る。趣。ある。を。其。凡。人。に。授。與。せる。方法
を。採用。して。醫。人。に。用。ふ。協。方法。を。備。す。む。事。は。い。や。不。足。こと
形。ら。ば。や。答。ふ。醫。人。に。授。與。せる。大。治。の。方。を。凡。人。の。用。ふ。る。事
あ。る。難。う。ら。ぬ。凡。醫。術。を。易。簡。め。して。能。く。效。あ。ゆ。上。策。と。爲

れ。む。凡。人。の。用。ひ。て。效。ある。字。醫。人。の。採用。せ。む。は。倍。そ。此。効
驗。を。奏。せ。傍。き。也。何。れ。不。足。二。也。う。有。傍。き。志。う。云。ふ。徒。自己。法
り。れ。凡。骨。を。換。へ。る。道家。の。人。に。上。り。は。あ。不。庸。人。ある。ま。や
醫。人。ある。也。庸。人。も。志。あり。て。好。ま。く。の。醫。人。は。大。に。勝。り
も。在。ぬ。傍。し。後。世。躬。擡。う。ら。良。醫。ある。と。誇。り。ある。徒。が。殊
更。小。岐。術。に。就。て。神。の。醫。道。に。淵。源。を。忘。れ。醫。術。方。藥。を。漸。く。小
難。艱。あら。し。め。遂。に。西洋。風。の。小。智。字。振。ひ。て。迂。拘。形。協。方。藥。を
神。と。も。神。を。信。尊。み。其。方。論。小。拘。く。ある。藪。醫。さ。り。世。小。多。く。殖
蕃。ら。む。を。將。ある。を。忌。は。し。き。事。に。出。そ。阿。波。禮。そ。此。藪。醫。ら。豈
夫。を。極。む。れ。は。然。る。世。と。共。小。病。狀。あ。り。倍。く。難。艱。を。生。む。る。神
理。の。存。る。事。を。今。此。眞。理。を。述。む。は。事。長。き。が。上。り。容。易。け。は。は
此。論。云。文。別。あ。る。或。人。難。じて。近。く。或。説。小。傷。寒。雜。病。論。中。文。辭

簡奧者。係古經之文。其他言涉迂拘。而文氣卑弱。世人以爲叔和所羈入。逐條更定。刪改字句。以爲復仲景之舊。惑亂後人。莫此爲甚。視諸叔和。其功罪之輕重。果奈何也。と云いて。攬入を去る字非とせり。此説は如何と云ふ。依ふ。答けらく。其は唯小古書を要じて。筐底小珍玩せむ不は。然も有るべきと。今取りて。治療小施し用ふる者。此省るべき説。非也。然るは其舊を存して。尊重を依。羈入の腐語。それ治病。何の益を有る。謂也。依方○因小云ふ。王叔和が姓名のおと。傷寒後條辨。王氏族略と云ふを引て。王叔和を姫姓周襄王之子王叔虎之後也。とあるを見まは。王叔和は其名を聞えと云。然るは抑加此二翁と。吾子王氏を書き。叔和と書く人あ。依を疎あり。法尋按。此時小當至て。徒小雜錯。此煩を爲。以のみある物字や。

そ此古を是とし。其遠きを貴いて。崇重はる小非也。其傳ふる道の。我が大神此道と至出て。精小入至。其功業亦。神此古道小因循せるが故小。此を取きり。是らの説を決めて。不審み思能石屋子説し。然まば。其説をし。二翁此真訣を重ぬとも。古道小徴し。實用亦驗して。應ざらむ。誰ぞ憚りて。其章句此際。拘拘ありむ。是余が二翁を崇信を依。要言あり。況て王叔和が攬奸疑なき小。於てまや。余や苟くも神の古道を講明するを以て。自任し。一部此鑿門斷定の書字も作至て。後來此鑿字爲以者小。鑿道の淵源を。知しめむ。欲をれば。固より然。依凡見小拘はる事なり。凡仲景方此攬入文を論する書。西戎。我。方有執。が條辨。愈嘉言。が尚論。編。ると。猶有れと。皇

國人の英斷及以。其は傷寒名數解。同劉氏傳。同特解。同集成。金匱要略注。名と要とある物あり。余それら此書を折衷し。集めて。考證せ。雅川翁此言く。良匠能與人規矩。不能使人必巧也。明師能授人方書。不能使人必爲也。と。亦去也や。二翁は。藥石方術を兼綜する良匠明師にして。規矩する方書をせし。授與せられ。其撓入る去さ依限るは。古面目を見たと能はる。且その功業も著明あらは。是を以て古今億兆の醫病兩家。その恩賴を蒙るは鮮れ也。世に在る良匠明師としも知らは。神方中興の鑿宗としも知ら也。殊に方術鑿藥は。車比兩輪の如く。方術う於本モ。依事モも得知ら也。孝先翁の名を更サあり。雅川翁此名をふル。知シざる醫人ら此多クるを。豈イテ慷慨ク事

知ら也や。猶委クは西蕃太古傳。及以志都能石屋小論ふ字見る信シ。但し方術鑿藥を。車比兩輪の如く相放シるおシき道存ス。古那命定療病方定禁厭法矣。百姓至今咸蒙其恩賴。而皆有効驗云々。と。あ依ル由緒ニ依りて。典藥寮ニ醫師呪禁師を置れ。唐土の鑿道も。其源を我ク神ニ道ヨリ出スるカ故ニ。方術醫藥相放シれ也。唐六典ニ大醫署ニ呪禁師を置テ。その方術ニ起リも載セり。傷寒論ニ序ニ留シ神ニ醫藥精究方術ト。何カ古ノ道ある也。と。是字ヲ以て知シ。然れば鑿を爲ス者ハ。おシ於テ神仙ニ道ヲを窺ヒて。未病を治ムる方術ヲ知リ。然して已病を治ムる依ル鑿ヲ。及ビ後ニ。未病を治ムる常ニあり。已病を變スる常ニ治ムる道ヲ知リ。さる者ハ。豈イテ變ヲを治ムる道ヲ知ラむや。然るを唯ニ鑿ヲをのミ知リて。護シ至シ小執ト。不レ任シ。鑿師ノ名字ヲ群愚ニ盜ミ。敗利ニ圖ル。子汲ク也。司命ノ職ト稱シ。君父ニ毛憚ル。亦モ無ク其藥ヲ。驚ム。豈イテ仁術ヲ云フ。後ニむや。

文政九年七月記

附録

或人告て云く。或人出此仲景考を見て。此を近く出ある金
匱要略輯義といふ書小。既論置とる事な依字。篤胤が
始めて考出とる如く云ふも。腹ぐろ於依事。敢りとして
れり。いり小其輯義を見よ。あいに於やと言ふ。己大き小驚
き。その書加て見よ。あを無れむ。あそ。年おろ此事。予毛
心を止えて。かく考定め。於る字。思いきや。既小同じ心
考定。とめ。於る人。此有む。とは早く其書を求め。讀てあそ
と答へて。やんて其書を求め。得て讀見よ。小余が考定。とは
甚く異あり。唯その綜彙。此條。仲景金匱玉函。究其目之所
繇。晉書葛洪傳云。洪著金匱藥方百卷。據肘后方及抱朴子。自
云。所撰百卷。名曰玉函方。則二者必是一書。由是觀之。金匱玉
函。原是葛洪所命書。即唐人尊宗。仲景者。遂取而為之。標題以
珍祕。不出之故。著錄失其目。歎林億。金匱玉函經疏云。繇仲景
有金匱錄。故以金匱玉函。名取竇而藏之。義也。案仲景金匱。他
書無其目。唯宋本及愈橋本。趙開美本。林序後。有一小序云。仲
景金匱錄云。僅出于此。予每疑之。然宋本已載之。則此必唐
末作要略者所撰。其文原于肘后方。序及抱朴子。味其旨趣。沉
澁不經。亦是道流之筆耳。と云ふ。説と彼小序の所小徐本刪

之。為是。と云ふ語の有。此みゆ。余が今の考定。也。同日小語
る。後き論。予非也。然る。或人。出を余と。同説あり。と云ふは。
稚川翁の謂。ゆる遠を貴び。近を賤み。古を是とし。今を非也。
以る輕薄家。れ。彼。予も。此を毛。孰く讀。受て。志。小。終。き。辭。意。よ
至出。と。依。誹。謗。と。出。そ。察。を。る。是。然。き。と。も。輯。義。小。此。説。あり
事を。知。る。は。其。或。人。の。語。小。依。れ。は。予。が。説。と。背。反。依。由
を。以。り。論。さ。む。予。ま。於。金。匱。玉。函。と。云。ふ。名。字。葛。洪。所。命。書。と
ある。も。然。る。説。あり。れ。也。唐。人。尊。崇。仲。景。者。遂。取。而。為。之。標。題。云
云。と。有。依。は。予。が。考。證。せ。る。と。は。甚。く。乖。背。至。金。匱。玉。函。を。仲
景。方。書。の。一。名。取。る。字。稚。川。翁。ま。と。他。の。方。書。を。毛。採。用。し。て。
あ。り。金。匱。此。字。を。毛。用。以。て。金。匱。王。函。方。と。題。ら。れ。る。物。有
る。と。と。本。文。云。依。れ。如。し。と。仲。景。金。匱。他。書。無。其。目。云。く。
宅。有。る。は。如。何。そ。や。肘。後。方。序。小。仲。景。金。匱。玉。函。を。毛。採。用。し。て。
れ。し。り。か。く。て。彼。宋。本。有。る。小。序。を。肘。後。方。序。と。抱。朴。子。序
ど。小。原。於。き。て。唐。末。小。要。略。を。作。れ。依。者。の。所。撰。と。定。め。る
は。い。宅。疎。漏。あり。余。が。考。證。せ。る。字。見。て。知。後。し。殊。小。そ。此。要
略。せ。依。時。代。字。唐。末。と。云。予。る。は。更。小。據。あ。き。説。に。至。彼。小。序
を。稚。川。翁。の。文。取。む。固。よ。り。道。流。此。筆。於。る。論。を。け。せ。と。
味。其。旨。趣。沉。澁。不。經。あり。至。と。て。徐。鏞。が。本。小。刪。れ。る。を。是。宅。為
ら。れ。し。は。輯。義。此。撰。者。も。い。お。と。醫。藥。の。道。は。玄。家。小。出。と。依

原の奥蔵よりしるすに於ては、
 其の書は、
 行ひ、
 志都の石屋の
 源の川崎重泰

源の川崎重泰

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目

塾藏版

○古史成文 <small>神代部</small>	三卷	○古史徵 <small>神代部六冊 開題記五冊</small>	十一卷
○古史傳 <small>自初卷至 十六卷</small>	四秩刻成	○古史本辭經 <small>五十音 義訣</small>	四卷
○神代系圖 <small>折本 箱入</small>	一帖	○同 <small>小折本</small>	一帖
○靈能真柱	二卷	○神拜詞記	一帖
○太元圖說 <small>石摺</small>	一幅	○古道學神号 <small>同</small>	一幅
○弘仁歷運記考	二卷	○神字日文傳	二卷
○皇國度制考	二卷	○祝詞正訓	二卷
○天津祝詞考	一卷	○古道大意 <small>講本</small>	二卷
○皇典文彙	三卷	○童蒙入學門	一卷
○牛頭天王曆神辨	一卷	○鑿宗仲景考	一卷
		○古今妖魅考	三卷
		○大祓詞正訓 <small>折本</small>	一帖
		○靜乃石屋 <small>同</small>	二卷
		○入學問答	一卷
		○玉多須喜 <small>二 快</small>	十卷
		○万聲大統譜	一幅
		○疑字篇 <small>日文傳 附錄</small>	一卷

○刻成書目

○全

○ 德行式 <small>石指</small> 一幅	○ 立言文 <small>同</small> 一幅	○ 鬼神新論 一卷
○ 出定笑語 <small>講本附錄</small> 二卷	○ 悟道辨 <small>同</small> 二卷	○ 伊吹於呂志 <small>同</small> 二卷
○ 俗神道辨 <small>同</small> 四卷	○ 撞木隨 卷	○ 木匠祖神号 <small>石指</small> 一幅
○ 赤縣歷代尺圖 一枚	○ 石指類 數種	○ 鑿祖神号 <small>同</small> 一幅
○ 宮比神御傳記 一卷	○ 武道祖神号 <small>同</small> 一幅	○ 日女島考 一卷
○ 古學二千文 一卷	○ 天滿宮御傳記略 二卷	○ 草木撰種錄 一枚
○ 神德畧述頌 一卷	○ 古道訓蒙頌 一卷	○ 先生の著書凡て百部卷數千卷に近し右全書目々於其書等の大意を別小記せる著述書目集を見て知る也 門人 生田固秀 河内盛征等記

